

複雑化が進む今こそ
本質を考えることが
求められている

哲学的思考を現代的課題へのアプローチにどう活かすか？

現代社会が抱える課題は複雑化が進む一方。私たちはその解決策としてテクノロジーに期待しがちだが、高度化したテクノロジーはそれ自身が新たな課題を生み出すというジレンマもはらんでいる。そこで改めて注目されるのが哲学をはじめとする人文科学系の学問であり、ものごとの本質をとらえる哲学的思考だ。これからの社会を支える若者にとって、哲学や哲学的思考を学ぶことがどのような意義をもつのか？ 哲学者の小川仁志氏に話を聞いた。

取材・文／伊藤 敬太郎

『そもそも何が問題なのか』を考えることが必要な時代になっている

日本が経済的な成長を続けていた時代は、社会課題は比較的シンプルで、ある程度まではテクノロジーの進化によって解決することが可能だった。

しかし、成熟社会を迎えた現代の課題はより複雑になっている。もちろん、テクノロジーもその解決策としては重要な要素だが、例えば、スマートフォンやSNSの普及によるコミュニケーションの変化、人工知能（AI）の急速な進化によって予見される未知の事態など、テクノロジーの進化そのものが、新たな課題を生み出しているという現実もある。

山口大学国際総合科学部准教授で『世界のエリートが学んでいる教養としての哲学』などの著書がある哲学者の小川仁志氏は、このような時代だからこそ、哲学が、そして哲学的思考が、あらゆる人にとって必要になっていると言う。

「世の中が複雑になりすぎ、今はさまざまな課題に関して、枝葉末節にとらわれた技術的な議論ばかりが繰り返されている状況です。そのため、『そもそも何が問題なのか』ということも多くの人が見失ってしまっています。求められているのは本質に立ち返って考えること。それが哲学なのです」

ただし、リアルな社会課題の解決に哲学がどのように関係するのか、ピンと来ない読者も多いかもしれない。特に日本では、哲学という学問が誤解されている面があるからだ。

高校生には、哲学者と主要な思想・著書を覚えるだけの暗記科目という印象をもたれやすい。また、一般の人も含めて、「哲学＝人生論、人生訓」ととらえられていることも多い。しかし、小川氏は、それらはまったく哲学の本質を見誤った認識だと指摘する。

では、ここで「哲学とはそもそもどういう学問なのか」を整理しておきたい。小川氏は哲学を「根源的・批判的にものごとの本質を探究し、それを論理的に言葉で説明すること」だと定義す

る。重要なのは覚えることでも従うことでもなく、「自分の頭で考える」ことなのだ。

図1に示したように、小川氏の定義によれば、ここには、高校教育においてキーワードになっている「探究」も、学問はもちろんビジネスの領域でも注目されている「クリティカルシンキング（批判的な思考）」も含まれる。「論理的に説明する力」も、今まさに高校生が養うべき力とされている。

このように、哲学は、「確かな学力」「生きる力」につながる重要な要素を包摂した学問なのである。

さらに別の切り口から、小川氏は哲学の構造と学び方を次のように解説する。

「哲学は、土台となる1階と、応用のための2階とに分けるとよりとらえやすくなります。1階は、『ものごとの本質に向き合う態度』のことです。まずは、もの考えるとはどういうことかを身をもって学ぶことが非常に大切。ここを養わずに、ただ考えるだけでは、

図1 「哲学」とはどういう学問なのか？

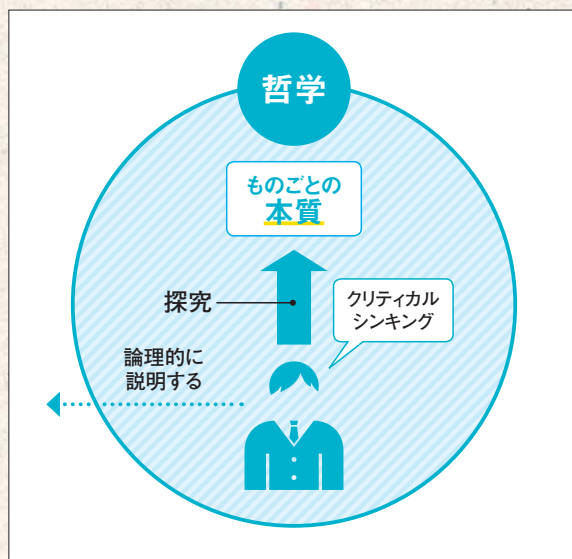
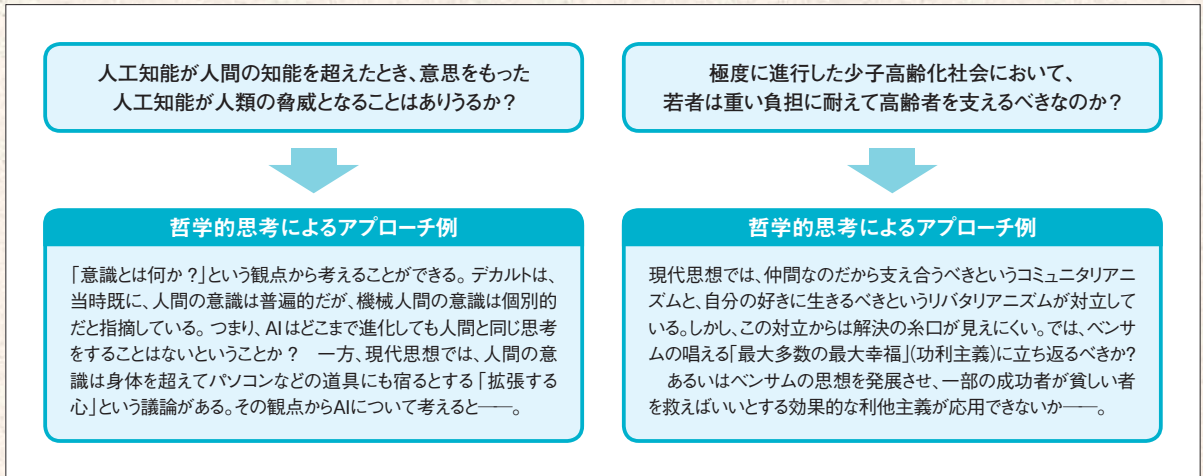


図2 現代的課題に哲学はどのようにアプローチできるか？



本質に至る思考の方向性が見えず、結局、思い悩んで終わりになってしまいます。そして、2階にあたるのが具体的な理論や思考法です。これを身に付けることで、個別の課題に対する哲学的思考の応用力が広がります。この2階も、そこだけを抜き出して、『弁証法』『共同体主義』などの用語や理屈を覚えても意味がありません。これらは、ものごとの本質を考えるために使うツールなのです」

哲学的思考力を養うために必要なのは 対話による実践的なトレーニング

ここまで整理すると、哲学や哲学的思考が、一学問分野には留まらない汎用的なものであることがわかる。だから、考える対象は実は何でも構わないのだと小川氏は言う。もちろん、自分の人生や生き方も重要なテーマの一つだが、現代のさまざまな社会課題もその対象になる。

図2に示したのはその例だ。人工知能(AI)について上のような問題意識を抱いたとしよう。1階の「本質を考える態度」が養われていれば、テクノロジーの領域でだけ議論をしても解決ができない問題だと気づき、例えば、「人間の意識と進化したAIの意識は同じなのか、違うのか？ 違うとしたら何がどう違うのか？」という本質に迫る思考の糸口をつかむことができる。そのうえで、2階に相当する理論や思考法から適切なものを参照することで、考えを深めていくことが可能になる。参照元は古典から現代思想まで豊富にある。この2階部分に関しては、関連する理論や思考法を知っていればいるだけ、応用範囲も広くなっていく。

「ただし、決して過去の文献に正解があるという意味ではありません。先人が築き上げたものを役立てながら、今そこにある問題を自分で考えることが重要なのです。結論は一人ひとり違っていい。むしろ、違うからこそ、それぞれが考える意味があるのですから」

では、このような哲学的思考の態度や方法を身に付け、使える思考ツールを蓄えるには、どうすればいいのだろうか。小川氏は、きっかけとして、図3に挙げたような哲学の古典に親しむことを推奨する。

「近現代の哲学書は難解なものが多く、そのせいで哲学を敬遠している人も多いでしょう。しかし、パスカルの『パンセ』、デカルトの『方法序説』、プラトンの『饗宴』などは哲学初心者の高校生にも十分読める書物なのでお薦めです。数百年も前の古典が、現代の最先端の課題を考えるのに本当に役立つのだろうかとか疑問に思う人もいるかもしれませんが、本質に迫る思考そのものは今も昔も変わりません」

これらの哲学者は、それぞれの時代の最先端の科学に精通

図3 哲学的思考を養うための古典3選

📖 ≫ 『パンセ』 パスカル

17世紀の哲学者パスカルが人間の思考と行動を鋭く分析したエッセー。有名な「人間は考える葦である」という言葉は、「人間は弱い存在だが、決して悩みを放置したり、逃げ出したりせずに、頭で考えて、それに立ち向かおうとする強い存在だ」という、現代人にもヒントになる思想を表している。

📖 ≫ 『方法序説』 デカルト

「我思う、故に我あり」で知られる、17世紀の哲学者デカルトの代表作。あらゆるものを疑って、そのあとに残ったまったく疑いえない何かを発見する「方法的懐疑」をはじめ、ものごとの本質について考える際の基本的な方法を解説している。現代でも通用する哲学的思考の教科書といえる本。

📖 ≫ 『饗宴』 プラトン

プラトンは、現実の世界に対して、完全な理想の世界(＝イデア界)があると主張したギリシャ時代の哲学者。「饗宴」は、このイデア論に基づいて愛の本質を論じた本。普段、私たちが当たり前に使っている「愛」という言葉の意味について、改めて問い直すときに参考になるテキストの一つ。

今、一般の人たちが集まって哲学的な対話をする「哲学カフェ」が全国で草の根的に広がっている。この3月に山口県萩市で開催された哲学カフェの主催者の一人、山口県立萩商工高校(取材時)の松嶋 渉先生に話を伺った。

「自分の生き方や萩で生きるということについて、地域の人たちが一緒になって考え、刺激し合う機会をもちたいと思い、地元の有志と企画しました。参加者は高校生から60代まで年齢も属性も予想以上に幅広かったですね」

30人が、初対面同士の3人ずつのチームに

分かれ、チームごとに自分たちで決めた「幸せとは何か？」などのテーマについて対話。お互いの社会的身分や価値観は関係なく、フラットな関係で語り合うのがルールだ。

「多様な人と本質的な対話をする、一人で悩み、考えるだけでは到達できない視点を得ることができます。自分の夢について主体的に考えることの大切さに気付いたという高校生もいて、やってよかったと感じました」

高校生や高校の先生にとってはキャリア教育の観点からも価値がある催しといえそうだ。



し、哲学の課題として取り組んできた。その思考のスケールは今の時代にも通用するものだ。17世紀のデカルトが機械人間について言及していることから、彼らがいかに本質から未来を見据えていたかがわかるはずだ。

また、現代思想にも『これからの「正義」の話をしよう——いまを生き延びるための哲学』(マイケル・サンデル著)のようにベストセラーになっている書籍もある。古典のガイドにもなるので、現代の国際社会への関心が高ければ、このような本を手にとってみるのもいいだろう。

ただし、書籍による学習はあくまで入門であり、本格的に哲学する力を養うのは対話によるトレーニングだ。

「本来であれば、フランスのように高校時代に哲学や哲学的思考についてしっかりと教育することが理想でしょう。しかし、現状の日本の教育体系の中ではそれは難しい。それだけに、大学時代に、いかにこのような思考のトレーニングを重ねることができるかが重要になっています」

PBLやサービス・ラーニングを通して 本質的に考える教育に取り組む大学も

日本の産業の発展を主役として支えているのはテクノロジーである。そのため、大学教育にも理系を重視する方向にシフトする傾向が見られる。しかし、ここまで説明してきたように、社会課題が複雑化する中で、哲学を中心とする人文科学系の学問の重要度も非常に大きくなっている。テクノロジーの進化も大切だが、今こそ理系・文系がそれぞれに担う役割を意識するべき時がきていると小川氏は指摘する。

「そのため、大学における哲学の授業も変わりつつあります。かつては、哲学といえば、文献を講読するタイプの授業が一般的でしたが、今は、対話を重視する授業や、今現実に起きている社会的課題を取り上げる授業など、実践的な内容のものが増えてきました」

哲学や哲学的思考は、文学部哲学科で学ぶことができるのはもちろん、一般教養の哲学でも学ぶことができる。また、それ以外の学科・科目であっても、地域の課題などに取り組むPBL

(プロジェクト・ベースト・ラーニング)、サービス・ラーニングなどで、「何が課題なのか」「何のためにやるのか」をしっかりと議論するタイプの授業も増えてきている。

「また、大学には同じような人生の課題に悩む同級生がたくさんいます。そんな仲間たちと、本質的な対話を重ねることも考える力を養ってくれるはずですよ」

このようにして鍛えられた哲学的思考は、社会課題を考える以外にも、さまざまな局面で役立てることが可能だ。

例えば、文化や宗教などバックグラウンドの異なる人たちと交流するグローバルな環境では、自分のアイデンティティを明確にして、それに基づいて主張し、議論することが求められる。「自分が何者であるか」を考えることはまさに本質に迫ることだから哲学的思考を活かすことが可能だ。また、禅などの日本哲学を学ぶことで、それまで意識せずに自分の中にあつた日本人独特の考え方を客観的に理解し、グローバルな場面で自分の強みとして役立てることもできるようになる。

「例えば、『結ぶ』という概念も実は日本特有のもので、日本人ならではのチームワークの基礎になっています。これを理解しておけば、グローバルな組織において、欧米の方法に日本の良さを取り入れたチームづくりなども可能になるでしょう」

ビジネスにおいても、前例の踏襲ではない、まったく新しい発想が求められる今、哲学は役に立つ。新しいものを生み出すために必要なのは本質に立ち返って考えること。まさに哲学的思考が応用できるのである。また、理系の人材が哲学的思考を学ぶことで、テクノロジーが生み出す課題に対する今までとは違うアプローチも可能になるだろう。

「本質を考えることは、これからの時代、どんな立場の人にとっても必要になります。しかし、社会に出たらもう応用の世界。だからこそ大学で基礎を身に付けてほしいのです」

授業の中で、自分や社会について本質的に考える機会があるか、そのようなテーマの対話を教員と学生が、あるいは学生同士が重ねる機会があるか——。大学教育も大きく変わりつつある中、このような教育の手法やプロセスを掘り下げて調べることも、生徒の大学選びにおいて大切なポイントの一つになっている。